

45 ラジオイムノアッセイによる β -スロンボグロブリン定量法の検討

国立東京第二病院 核医学

○与那原良夫、佐々木由三、高原淑子、

国立南横浜病院 内科

倉光一郎

血管障害における血栓形成過程での血小板の粘着、凝集、融合変形 (viscous metamorphosis) 形成時において、血小板に特有なたん白である β -スロンボグロブリンや抗ヘパリン作用を有するペプチドである血小板第4因子が血中に遊離する。従つて血管内凝固や血小板機能の著明なこう進の発現に際しては、これらの物質の濃度の増加を示すことになる。

われわれは β -TG RIA キット (Amersham) を用いて基礎的検討ならびに脳血管障害症例を中心とした臨床的検討を加えた。なお一部の症例ではフマル酸ベンシクラン (300mg/日) 投与による脳血流改善効果についても検討を加えた。

成績:

- 1) 本法においては乏血小板血漿試料を得ることが必要であり、従つて採血後血漿分離までは確実に低温を保ち、この際遠沈には充分時間をかけ (約30分) するべきで、この過程が本法による検査の精度管理上重要な点として挙げられよう。
- 2) 1) の条件に満足した乏血小板血漿を用い、既知濃度の β -TG を含む血漿に一定量の標準 β -TG を添加して行つた回収率は略満足すべき成績を示した。
- 3) 測定値は正常例平均27、2ng/ml で、一方脳血管障害例では48、4~98、6ng/ml の幅で広く分布した。
- 4) 脳血栓症例におけるフマル酸ベンシクランの効果を本法で追跡した結果は増減あり区々であつた。

46 血中CEA値の臨床的検討

埼玉県立がんセンター 放

○角 文明、中島哲夫、玉井恒子

渡辺義也、砂倉瑞良

聖マリアンナ医大 三内

佐々木康人

群大 放

永井輝夫

血中CEA値は結直腸癌患者に高値を示し、治療効果と相関し、再発巣や肝転移の指標となりうると報告されてきた。その他の消化器系悪性腫瘍、乳癌または肺癌等との関係も報告されている。今回、我々は諸々の疾患に対し、血中CEA値との関係を臨床的に検討した。

対象は昭和52年1月より53年5月までに、当センターRI検査室に於て測定した774検体、374症例についてである。疾患別内訳は、消化器系悪性腫瘍160例 (胃癌79例、結直腸癌43例、その他の悪性腫瘍38例)、乳癌63例、肺癌51例、泌尿生殖器系悪性腫瘍23例、悪性リンパ腫及び白血病7例、その他の悪性腫瘍30例、および良性疾患43例 (正常者7例) である。ダイナボット社製CEAリアキット (サンドイッチ法) を使用し、2.5mg/ml 以下を正常値とした。

結果、悪性腫瘍の陽性率は胃癌38%、結直腸癌62%、その他の消化器癌43%、乳癌23%、肺癌52%、泌尿生殖器癌45%、悪性リンパ腫及び白血病0%、その他の悪性腫瘍21%であった。臨床経過の悪化と血中CEA値の上昇、治療前後でのCEA値には相関を認めた。強陽性 (30mg/ml 以上) を呈したものは23例で、胃癌8例、結直腸癌10例、乳癌5例であり、いずれも広範囲な病巣又は全身転移巣を認めた。